

別解「人間じんかん至る処青山有り」(『下商新聞』、令和4年10月18日)

校長 久保田 力哉

明治17年以来、本校は138年に亘る歴史の中で、県内はもとより国内外の各界・各方面において有為な人材を輩出してきましたが、その数は令和3年度末で3万人を超えました。

残念ながら、定時制課程は同年度末をもって、昭和27年に設置されて以来の70年という長い歴史を閉じました。卒業式終了後、閉課程式を挙りましたが、卒業生も駆けつけてくれ、下商定時制らしいアットホームな雰囲気の中での閉課程式となりました。

さて、今回は幕末の思想家、僧げっしょう月性を紹介したいと思います。

月性は、幕末に活躍した尊王攘夷派の一人であり、海防の必要性が差し迫ったときの具体的対応策である『内海きゆう杞憂』を著したことから、「海防僧」とも呼ばれていました。

月性は、文化14年(1817年)、周防国遠崎(現柳井市遠崎)の妙円寺に生まれました。幼い頃は、学問など見向きもしない非常な腕白者でしたが、ほどなく月性は熱心に勉強するようになっていきます。

また、月性は早くから萩の諸名士と交際する機会を得ました。特に吉田松陰の兄、梅太郎とは早くから交流を持っていました。

月性は15歳の時、九州の豊前(現大分県)で4年余り詩文を学び、その間、寸暇を惜しんで猛勉強していますが、入門して程なくその天賦の詩才を大いに発揮します。また、当時日本においての舶来新知識発祥の地である長崎へも遊学し、初めて航行するオランダ船を見て、船体、備砲の巨大なことに驚き、後に月性が海防僧として奔走する要因ともなりました。

その後、月性は故郷の妙円寺に戻り、清狂草堂せいきょうそうどう(別名 時習館)という学習館を開設し、山口県だけではなく広く中国地方から多くの門下生を集め、幕末期において次代を担う人材育成に尽力しました。ここでは身分の分け隔てなく、国難を打破すべく海防を中心とした熱い講義が行われたとされています。

また、月性は吉田松陰とも交流がありました。萩藩で村田清風せいふうを支持する周布政之助すふまさのすけ派と松陰を支持する松下村塾派で争いが起こりかかったとき、月性は松陰の願いを受け、柳井から萩まで出向き仲裁に当たったとされています。なお、柳井市にある月性記念館には、松陰直筆の書も所蔵されています。

月性は、この萩調整からの帰路で病に倒れ、安政5年に42歳の若さで亡くなりましたが、彼の蒔いた種は明治維新という形で大きく開花しました。

ここで、月性と吉田松陰の交流の深さを物語る資料を紹介します。

松陰が松下村塾の門弟のために著した遺書とされている『留魂録』^{りゅうこんろく}の第15章に、以下のような記述があります。

清狂の護国論及び吟稿、口羽の詩稿、天下同志の士に寄示したし。故に余是れを水人鮎沢伊太夫に贈ることを許す。同志其れ吾れに変わりて此の言を踐まば幸甚なり。

【清狂（月性）の書いた護国論と吟稿、口羽徳輔（長州藩寺社奉行）の詩稿は天下の同志たちに是非見せたいと考えていた。だから私は水戸藩の鮎沢伊太夫にこれを贈り託す。私に代わってその思いを果たしてくれるとありがたいのだが。】

この記述からも、松陰が如何に月性を信賴していたかがわかりますが、さらに松陰は松下村塾を休講してまで、月性の講演を塾生たちに聴講させていたという記録も残っています。

次に、月性が京都遊学に出発する前に詠んだ『將東遊題壁（まさにとうゆう せんとしてかべに だいす）』という詩を紹介します。

男児志を立てて郷関^{きょうかん}を出づ
学若^もし成る無くんば復還^{またかえ}らず
埋骨何ぞ期せん墳墓の地
人間至る処^{じんかんいた}青山有^{ところせいざん}り

【志を立てて故郷を出発したからには志を果たすまで故郷の土を踏むことはない。世の中のどこにでも骨を埋めるべき場所はある。】

最後の「人間至る処青山有り」はとりわけ有名ですが、ここでひとつ私から提案があります。

本年度の本校の学校教育目標スローガンは「夢を志へ」ですが、月性のこの詩を、「志を果たすまで故郷の土を踏むことはない」というよりも、「志を果たして故郷の土を踏む」あるいは、「志をこの下関で果たしていく」というように解釈してみてもどうでしょうか。そうすれば、この詩を、より積極的かつ主体的な意味に捉えることができると思います。

卒業後、下関に残る人も、いったん地元を離れる人も、職場や進学先でしっかりと力を付けて、いずれはこの下関を支えてくれる人材になってもらいたいと切に願います。

また、今回の寄稿が、「人間至る処青山有り」の覚悟を持って、人材育成にその生涯を捧げた月性を知ってもらえる機会となれば幸いです。

(注)

村田清風

江戸時代後期の長州藩士（家老）。多額の負債返済のための儉約の徹底や、武士の負債整理と土風の一変、四白政策(紙・蠟・米・塩)の振興などの「天保の大改革」を行い、藩政を一新した。(出典・やまぐちお散歩日和)

周布政之助

幕末の長州藩士。高杉晋作とともに長州藩士の暴発を抑えようとしたが失敗、その結果起こった禁門の変や第一次長州征伐でも事態の収拾に奔走したが、次第に反対派に実権を奪われることとなった。(出典・ウィキペディア)